研究主題

学び続ける子供が育つ授業の創造　－対話に着目して－

～各教科における学び続ける子供の対話の在り方を明らかにする～

Ⅰ　研究主題について

1　研究主題設定の理由

⑴ 時代の要請の視点から

人工知能やビッグデータ、IoT、ロボティクス等、先端技術は高度化し、あらゆる産業や社会生活に取り入れられ、今やなくてはならない存在になっている。これらの存在に対してより必要性を感じ、社会が先行き不透明であることをより一層実感した出来事が、新型コロナウィルスの世界的な感染拡大であったと言えるだろう。私たちは、変化が激しく、様々な予測が困難な時代を生きているのである。

このような時代に、子供がその変化を前向きに受け止め、多様な人々と協働しながら豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となっていくための資質・能力を育成していくことが求められている。

そのためには、変化し続ける答えのない問題に子供がどう立ち向かうかが重要である。目の前の事象から解決すべき課題を自ら見いだし、主体的に考え、多様な考えをもつ者同士が協働的に議論し、自分の納得できる最適解を生み出していく力が必要となろう。そして、学びが生活と結び付き、社会の中でどのように役立つのかまで考えながら、次の新たな問題に立ち向かっていくこと、即ち、学び続けることが重要となるのである。

⑵　本校のこれまでの研究の視点から

本校では、これまで「対話」「追究」「思考」「認識」「深い学び」をキーワードに研究を重ねてきた。前研究「深い学びの実現に向けた教育課程の創造」では、以下のことが明らかになった。

①　子供が学びがいを感じながら学習対象と十分に関わり、自分の考えに自信をもつ。その上で、ズレを感じることで子供は自ら問いをつくる。

②　他者との関わりを通して解決のための視点を見いだし、その視点から自分の考えを検討し、再び学習対象と関わることで、子供は自ら問いを解決し、考えをより本質に迫るものへとつくり直す。

一方で、課題は、問いの解決のための視点を見いだす際の「人との関わり」における教師の見取りと手立てに多く見られた。そこで、これまでの本校の研究の成果である、人との関わりを研究した「対話」を取り入れ、残された課題を解明していく。

２　「学び続ける子供」とは

学び続ける子供とは、各教科等の見方・考え方を働かせながら試行錯誤する中で、学びがいを感じ、自ら次の学びに向かう子供である。

「見方・考え方を働かせながら試行錯誤する」とは、子供が「やってみたい！」「どうなっているの？」「どうして？」と思ったことについて、思いや願いをもち、各教科の見方・考え方で学習対象を捉え、必要感をもって関わっていくことである。また、安易に結論を出すのではなく、様々な視点や方法で考えたり、一般化を図ったりするなど、自分が納得できるまで粘り強く考え続け、自分の考えや表現をつくり上げることをいう。

「学びがいを感じる」とは、子供が問題を解決していく過程で、学習対象や他者との関わりを通して教科等のもつ本質に触れ、学習することへの楽しさや喜びを感じることである。教科等の本質に触れることは容易なことではない。本質に触れるためには、何度も対象と関わり、他者のもつよさに触れて考えを見直し、共によりよい考えを構築していくことが必要である。

「自ら次の学びに向かう」とは、子供が自分の高まりを実感し、自ら新たな問題を見いだし、次の活動へと歩み出すことである。自分の高まりを実感した子供は、自分の考えや学び方等に自信をもち、新たな問題解決へと見通しをもって歩み出そうとする。さらには、学ぶことに楽しさや喜びを感じ、教科等の枠組みを超えて考えたり、日常生活や社会と関連付けて考えたりするようになる。

３　「対話」とは

過去の研究「対話的思考による学習」「対話する子供を目指して」における対話の定義と、学習指導要領における「対話的な学び」の定義も含め、本研究における対話を以下のように定義する。

「対話」とは、子供が必要感をもって相手を求め、互いに受け入れ、考えを吟味し合うことである。

「必要感をもって相手を求める」とは、子供が願いの実現、問題解決に対する必要感から、自ら他者への関わりを求めることである。

「互いに受け入れる」とは、自分の不完全性の自覚と、相手が自分にはないものを必ずもっているという意識を前提として、相互に受け入れようとすることである。

「考えを吟味し合う」とは、考えが納得のいくものか、適切であるか、よりよいものであるのかを話し合う、協働的な学びをすることである。

対話の意義は、子供同士が互いに様々な考えを交流し合う中で、自分の考えを見直し、よりよいものにしていくことにある。子供同士のこうした対話が生まれるためには、日頃から、全ての子供が安心感をもって授業に臨んでいること、また、互いの考えを聴き合う関係ができていることが重要である。

Ⅱ　副題について

副題の年次計画（案）

研究主題　「学び続ける子供が育つ授業の創造」－「対話」に着目して－

令和２年度　（ 初年度 ）「学び続ける子供」の様相を明らかにする
令和３年度　（ ２年度 ）子供が自ら問いをつくるための教師の手立てを明らかにする
令和４年度　（ ３年度 ）子供が自ら問いを解決するための教師の手立てを明らかにする
令和５年度　（最終年度）各教科における学び続ける子供の対話の在り方を明らかにする

研究初年度は、学び続ける子供が、授業の中で具体的にどのような様相を示すかを明らかにした。成果は以下の通りである。

「学習対象との関わり」の場面

①　「あれ？」「おや？」という問題意識や、「～したい！」「～になりたい！」という思いや願いを強くもち、学習対象に働きかける。
②　試行錯誤する中で、各教科等の見方・考え方を働かせ、自分の考えや表現をつくる。
③　自分の考えの根拠を明確にし、自分の考えに自信をもち、他者に伝えたくなる。

「問いをつくる対話」の場面

①　友達の考えを知り、自分の考えと比較することでのズレを感じる。
②　なぜズレを感じたのか知りたくなり、友達に関わりを求める。
③　友達と関わり、ズレの要因が分かることで、自分の考えたいことを明確にしながら、本気で解決したい「問い」をつくる。

「問いの解決へ向かう対話」の場面

①　既習を生かし、各教科の見方・考え方を働かせながら、問いの解決方法を予想する。
②　互いの考えの意味を理解しながら、問いを解決するための視点を見いだす。
③　解決のための視点から学習対象に再度関わり、問いの解決へ向かう。

研究２年度は、初年度の成果を基に、「問いをつくる対話」に焦点を当てた。ここでは、主に「人との関わり」において、子供が自分の考えとズレを感じる考えに出合った時、誰に、どのように関わりを求めて、自ら問いをつくるのかを丁寧に見取った。成果は以下のとおりである。

・子供全員に必要感のある課題を設定し、考えるべき内容を焦点化することで、子供は友達と自分との考えにズレを感じる。
・子供の考えの背景を捉え、どの考えとどの考えにズレを感じるかを具体的に想定した上で、話合いでの子供の発言を「立場」「価値観」「妥当性」等で意味付けながら板書に整理していくことで、子供はズレの要因を明らかにしていく。
・学級全体に対する「問い返し」や「発問」により、子供の総意を確認しながら、子供が問いをつくっていく過程を支えることで、全員にとって必要感のある問いが生まれる。

研究３年度は、「問いの解決」に焦点を当てた。子供が自ら問いを解決する時、どのように関わりを求めて問いを解決していくのかを丁寧に見取った。成果が見られた手立てと課題は以下の通りである。

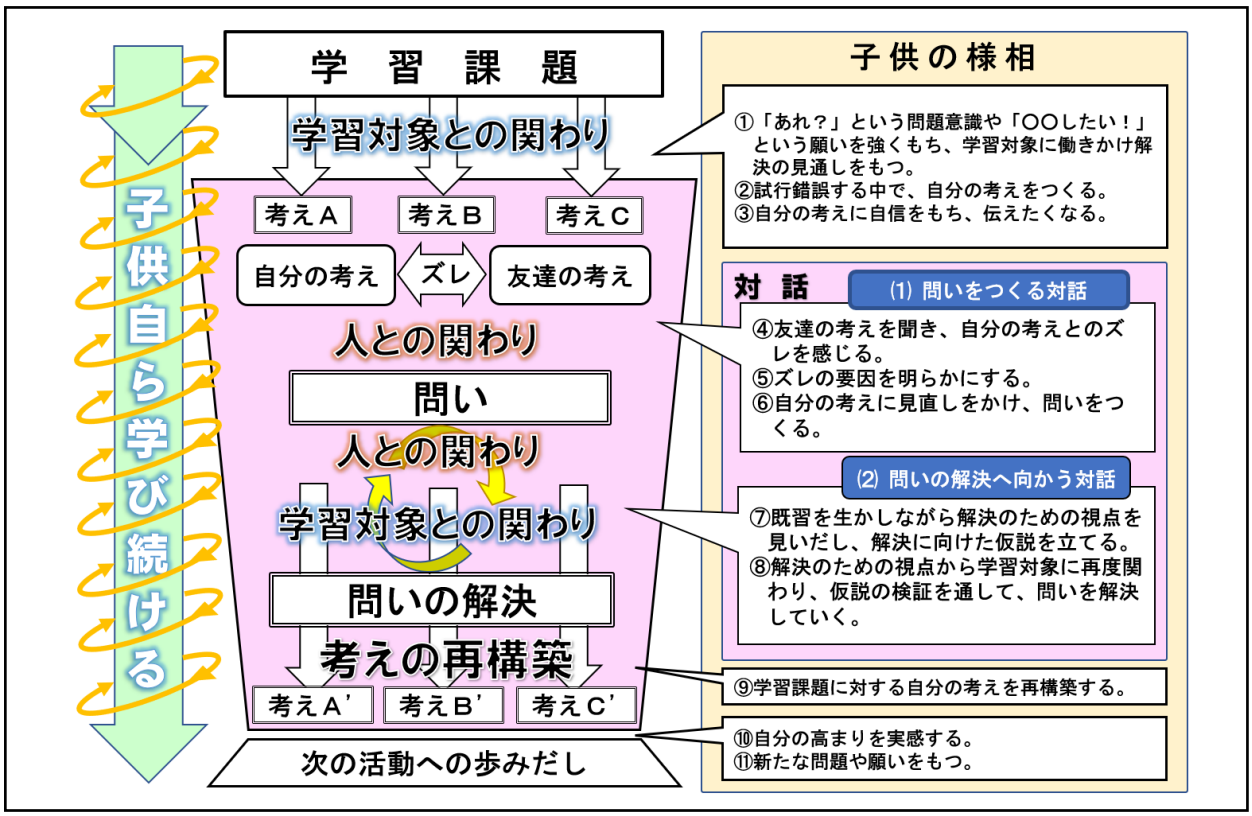
・解決のための視点に関連する内容を、子供がいつでも振り返ることができるよう、板書や掲示等で可視化するなど学習環境を整えたり、解決のための視点に関連する内容に着目することができるよう、解決のための視点に関連する考えをもった子供を意図的指名したりすることで、子供は既習を生かしながら解決のための視点を見いだしていく。
・子供が「もしかしたらこうかな？」と予想したことに対して、その有用性を吟味できるよう、予想に対する立場や根拠、意図等、子供の背景にある情報を具体的に引き出せるよう問い返しをしたり、追体験の場を設定したりすることで、「やっぱりこれで解決できそうだ」という解決に向けた仮説を立て、検証することで問いを解決していく。
・学び続ける子供の学習過程の図を土台とし、共同で研究していくことで、学び続ける子供の様相や、そのための手立てが見えてきた。その手立ては重要である一方で、一般化した手立てになるため、各教科・領域ならではの学び続ける子供の育成におけるさらに深く具体的な手立てに言及することにおいて課題が見られた。

最終年度は、各教科・領域に焦点を当て、「学び続ける子供の育成」について研究を進める。ここでは、各教科・領域に応じた対話の在り方や、自己の学びを調整するための条件や教師の手立てを明らかにしていく。

Ⅲ　「学び続ける子供」が育つ学習過程

授業の中で学び続ける子供は、次のような学習の過程を通ると仮定する。

【学び続ける子供が育つ学習過程（４年度仮説）】



研究用語について

「ズレ」とは、自分の考えと友達の考えとの違いから抱く違和感や疑問、憧れ等のこと。

「問い」とは、ズレから焦点化された解決したい、あるいは達成したい問題や課題を指す。当初の学習課題よりも、考えることが明確化されたものであり、その解決により、より本質的な知識や技能に迫ることができるもの。

「解決のための視点」とは、単元の本質に迫るために考えを見直す視点のことである。子供がすでにもっている視点で、問いを解決するために用いる視点のこと。

学び続ける子供を突き動かしているのは、知的好奇心や憧れの心等である。子供は、これらの心を基に学習対象と関わることで、強い願いや問題意識をもち、必要感をもって学習対象に関わり続けようとする。そして、そのような子供は、その子供なりの学習対象への思いや考えを明確にもちながら自分の学びを深めていく。

このような子供の学びを大切にして授業を行った際、二つの様相が見られる。一つ目は、自分の考えに自信をもち「自分の考えや表現を友達に伝えたい」という他者に自分の考えを分かってもらいたいという様相である。二つ目は、今の自分の考えには、まだ足りない部分があるかもしれないという不完全性を自覚した上で、「友達の意見を聞きたい」と自分にないものを他者に求めようとする様相である。いずれの様相も、子供にとって必要感のある“人との関わり”の中に生まれていた。

子供が必要感をもって友達との関わりを求めている場面では、次の二つの「対話」が生まれると想定している。

○　友達の考えとのズレから、子供が問いを見いだす過程で生じる「問いをつくる対話」

○　子供が見いだした問いを解決するために生じる「問いの解決へ向かう対話」

これらの対話を通して、子供は、自分が考えたいことを明らかにし、自分にはなかった考えを基に自分の考えを見直し、考えを再構築していく。そして、新たに考えたいことを自ら見いだし次の問題解決のサイクルへと進んでいくのである。

Ⅳ　４年度の研究の重点

「学び続ける子供」を育てるには、子供が必要感をもって学習対象と関わり続け、対話を通して自分では気付かなかった新たな考えと出合い、自分の考えを見直したり再構築したりする中で、学ぶ楽しさや喜びを感じられるようにすることが大切である。この考えを基に研究を進める中で、学び続ける子供の様相や、その様相が見られる条件が明らかになってきた。一方で、各教科における対話に着目すると、その内容や形式、場面が一様ではなく、教科によって特徴的な対話が見られることが分かってきた。

そこで、４年度は「各教科における、学び続ける子供の対話の在り方を明らかにする」を副題とし、研究を進めていくこととする。「対話の在り方を明らかにする」とは、現在の各教科の対話の現状と課題を把握し、子供が学び続けていく上で生まれる対話の目指す姿を設定し、目指す姿に向けて、授業を通してどのような手立てを講じるかを考える、これら一連の営みのことである。

Ⅴ　研究方法について

１　研究の計画段階において

今年度は、各教科における対話の在り方について示し、対話を通して学び続ける子供の育成に向けて研究の計画を作成する。そのために、まず各教科における対話の特徴や、対話が顕著に生まれた場面、対話が生まれなかった要因を見いだし現状を把握する。次に、把握した現状から、目指す子供の姿を見いだす。最後に、目指す子供の姿に向けて授業を構想し、教師の手立てを見いだす。これらの過程を経て、対話が生まれる場面や様相、その様相が見られる条件を研究計画に記し、実際の授業を通して目指す姿の具現化を図る。

２　授業研究において　　※太字は今年度の重点

授業研究においては、今年度の副題「各教科における学び続ける子供の対話の在り方を明らかにする」ことに重点を置き、研究を進めていく。

①　各教科において学び続ける子供はどのような場面で対話するのか。 ②　各教科において学び続ける子供が対話する条件とは何か。

⑴　**「各教科特有の対話」の場面や条件を想定しながら授業研究に取り組む。**

⑵　「学び続ける子供が育つ学習過程」と昨年度明らかになった子供の様相を基に、学び続ける子供を育てるための手立てを考える。

⑶　指導案の全体構想には、単元の本質と、学び続ける子供の対話の様相（学習対象との関わり、問い、問いの解決）と手立てを記載する。

⑷　学習対象との関わりについては、子供の見方・考え方が顕著に現れる。子供が、見方・考え方を働かせて学習対象と関わる姿を想定し指導案に具体的に記載する。

⑸　事後研修において、次の内容を視点とし、ねらいが達成されていたかを協議する。

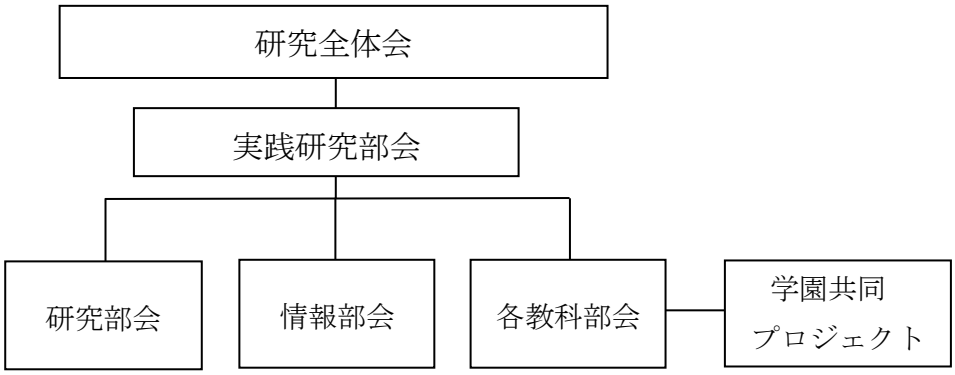
①　子供が必要感をもって学習対象と繰り返し関わり、自分の考えや表現をつくり、その考えの根拠となるものをもっていたか。

②　「自分の考えを伝えたい」、「友達に聞いてみたい」という、あふれ出る願い、切実感、必要感があったか。（他者への関わりを求める姿があったか）

③　**各教科において問いをつくる、問いの解決へ向かう対話が生まれたのは、どのような条件があったからか。また、生まれなかったのはなぜか。どのような条件が必要だったのか。**

Ⅵ　研究推進のための主な日程と組織

【研究の日程】

R5　６月	研究部会 研究全体会	研究発表会の反省・今後の研究方針の検討 研究部案の検討と方針の決定
７月	研究全体会	研究部会の報告並びに研究主題の構想
８月～９月	研究部会 研究全体会	研究計画の執筆および検討
10 月～ R6　７月	実践研究	研究主題の解明に向けての研究授業（全員） 全体研修会
７月	研究全体会	研究のまとめ
11 月	教育研究発表会	

【授業研究の組織】